〔凡　例〕

翻刻にあたり、次のような処置を施した。

一、行取りは底本に随い、私に句読点を施した。

二、旧字や異体字は、一部を除き通行の字体に改めた。

三、当て字や誤字はそのまま表記し、右傍に（ママ）と付した。

四、各段ごとにC・C本との詞書校異および注記を次のように示した。

　　暦応模本本文→C・C本本文

◎翻刻　融通念仏縁起

絵　越前守長隆

融通念仏縁起　上巻　　」元表紙外題

【第一段】

大原良忍上人は、もとは叡山の住侶、[1]
顕密無双の碩徳なり。しかりといへとも、
無上菩提のこゝろさしふかきによりて、
无動寺へ千日のあいたまうてゝ一心
に菩提心をいのり、つねは隠遁の思
たえすして、生年廿三にして、つゐに
三千の交衆を辞して、大原の別所
にふかく籠居して、四十六のとしに
いたるまて、首尾廿四年の間常座不眠
にして、厭欣の信心ふかく、往生極楽
のゝそみ猛利にして、日夜十二時の間
ひまなくこん行し給けり。[2]

《絵①》

1　もとは→□□は

2　こん行し→勤行し

【第二段】

聖人、生年四十六にいたる夏日中に、
仏力によりてたちまちに睡眠す。ねふり
のうちに、阿弥陀如来示誨してのたまはく、
汝か行不可思議也。一閻浮のうち、日
域のあひたに、すてに一人ありとす。
これまことに無双なるへし。しかりと
いへとも、なむち順次の往生まことにもて
かたき事あり。[1]そのゆへは、我土は
一向清浄のさかひ、大乗善根の国なり。
少善根福徳の因縁をもちては、彼仏土
に生かたし。汝か行業のときにては、[2]
たとひ多生広劫をゝくるとも、順次
往生の業因にそなへかたし。はやく速
疾往生の勝因をゝしへんとおもふ。いは
ゆる圓融念仏これなり。融通念仏は
一人の行をもて衆人の行とし、衆人行をも
ちて一人の行とするか故に、功徳も広大
なり。往生も順次なるへし。一人も往生をとけは、衆
人も往生をとけむ事うたかひあるへからすと云々。
阿弥陀如来の示現かくのことし。くはしくは、
しるすにいとまあらす。

《絵②》

1　その→其

2　ゝくる→こゆる

【第三段】

今この阿弥陀如来の告におとろきて、年
来自力観念の功をすてゝ、ひとへに融通
念仏勧進のこゝろさしをこり、他力称名の

行者となり給て、天治元年甲辰六月九日より
始て、聚落にましはり、上一人より下万民に
いたるまて、道俗男女、貴賤老少相合にした
かひて、あまねくこれをすゝめ、その姓名を
記録して、如来蔵にこれをおさむ。彼の一々の
名字事なかけれは本帳にゆつりて
これをとゝむるところなり。

《絵③》

1　その→其

【第四段】

この念仏勧進のあひた、早旦に青衣
を着せる壮年の僧、忽然として上人の
大原の菴室に化来して、念仏の帳
に入へきよし、これを自称す。名帳を
ひらき筆をくたして、たちまちにかくれ
をはりぬ。聖人、不思議の思をなし、名帳
を開給に、正しくこの文字あり。其詞に云、
奉請念仏百反、仏法護者鞍馬寺毘
沙門天王、念仏の結縁衆を守護せんかた
めにきたりたる所也と云々。この天王は、五
百十二人のつきに入給へり。大国の事はし
はらくこれをゝく。我朝にとりては奇代不
思議の事なるものをや。

《絵④》

1　ひらき→開
2　鞍馬寺→安（左ルビ「鞍」）馬寺
3　つき→次

【第五段】

又上人、天承二年四月四日乙丑、鞍馬寺へ参
詣してよもすから念仏し給しに、寅剋
はかりに、天王幻化のことくして、上人に
つけてのたまはく、我さきに念仏百反
うけたてまつりぬ。われ汝をまほる事、
かけのかたちにしたかふかことし。又お
なしく正法をまほる一切の冥衆等、
面々に百反つゝをうけ、融通念仏の結
縁に入給へる名帳、これをたてまつる。本帳
にくわへ給へしとて、上人の前にさし
置給へり。時に心神夢のさむるかことし。
見れは眼前に一巻の書あり。開て
これを拝するに、かくのこときのもむ
あり。

梵天王等部類諸天百反　帝尺天王部類諸天百反
持国天王部類諸天百反　増長天王部類諸天百反
広目天王部類諸天百反　吉祥天女部類諸天百反
弁才天王部類諸天百反　地天部類諸天百反
水天部類諸天百反　火天部類諸天百反
風天部類諸天百反　迦楼羅天王部類諸天百反
閻魔天部類諸天百反　氷迦羅天部類諸天百反
童子百反　摩利支天女部類諸天百反
妙見菩薩部類諸天百反　龍樹菩薩等諸弘経大士百反
訶利帝母部類眷属百反　大黒天神部類諸天百反
執蛇天王部類眷属百反　北斗七星部類眷属百反
日天子等部類眷属百反　月天子等部類眷属百反
明星天子等百反　愛染王百反
尊星王百反　持世天等部類眷属百反
摩醯天羅天等部類眷属百反　九曜等部類眷属百反

廿八宿等部類眷属百反
沙竭羅龍王等諸神衆百反
秦広王部類眷属等十王各百反
司禄部類眷属百反
伊勢内宮外宮部類眷属百反
日吉七社部類眷属百反
祇園部類眷属百反
那智飛瀧権現部類眷属百反
鹿嶋部類眷属百反
大社部類眷属百反
北野天神部類眷属百反
白山部類眷属百反
富士浅間部類眷属百反
広田南宮各部類眷属百反
安房須龍口部類眷属百反
住吉四所部類眷属百反
大原野部類眷属百反
気比部類眷属百反
伊津岐嶋部類眷属百反
竈山法万大菩薩百反
上下宮部類眷属百反
兵主部類眷属百反
播磨伊和荒田等部類眷属百反
小一領等六十余州大小2一切神祇冥道各百反
欲界所有一切天衆各百反　色界所有一切天衆各百反
無色界所有一切天衆各百反
惣三千大千世界乃至微塵類所有一切諸天神祇各百反
　已上惣微塵類億百万遍云々
諸天冥衆の名帳かくのことし。例せは、むかし
尺迦如来天竺にして、弥陀の名号の不可思議
十二神将等八万四千鬼類百反
善如龍王等諸龍衆百反
符(府)君司命部類眷属百反
賀茂下上各百反
宇佐八幡部類眷属百反
春日四所部類眷属百反
熊野三山部類眷属各百反
金峯山蔵王部類眷属百反
香取部類眷属百反
熱田八釵部類眷属百反
伊豆走湯部類眷属百反
稲荷三所部類眷属百反
三嶋部類眷属百反
陬波南宮部類眷属百反
多度部類眷属百反
箱崎部類眷属百反
大多(泰)年知部類眷属百反
朝明(明)上下部類眷属百反
瀬振部類眷属百反
伊多幾曽嶋神化三所部類眷属百反
伊吹部類眷属百反
三尾部類眷属百反
弘峯部類眷属百反

の功徳を説給し時、六方恒沙の諸仏、同時にこそりて舌を大千におほひ、滅後造罪の凡夫、念仏して往生すと説給へるは決定也と証誠し給しかことくに、今又末法にいたりて、小国辺土なりといへとも、日本我朝にして、良忍上人他力念仏を勧進し給とき、三界所有の天王天衆、悉此念仏を讃嘆称揚して、面々に結縁に入給し事、在世の諸仏の称讃にことならす。彼は本地極住の如来、是は垂跡和光の応身也。本跡ことなりといへとも、衆生勧化の志、これおなしきものなり。

《絵⑤》

1　持国天王等→持国天王

2　大少→大小

【奥書識語】

上巻紙数廿四枚記

上暦応三年十月十三日中御門僧経源作

融通念仏縁起二軸

越前守長隆真蹟

絵　越前守長隆

融通念仏縁起　下巻

」元表紙外題

【第一段】

上件の天衆達□[1]念仏衆に入御坐
事、既にきこえ畢。但其御意趣を尋れは、
釈梵護世諸天等御集会ありての給はく、[2]
まことに三世の諸仏は念弥陀三昧によりて
正覚をなり給たりと、般舟三昧経には
まさしく説たり。しかれは当時世間に
放光して聞ゆる融通念仏は、阿弥陀
如来良忍上人の□[3]□来現してたしか
に授給たる速疾往生の他力の法也。
利益も広大に、功徳も莫太也。善人も
悪人もひとしく生れ、大聖も小聖も浅
深をいはす、願力に乗しぬれはゆく事
さまたけなし。いさや我等もこの大善に
くみして五衰退没の苦をはなれ、[4]
共に安養無□□[5]報土にいたりて、同正
覚をならむと云々。爰、仏法護持の多聞天
王、勧進のひしりとして、三千大千乃至微
塵類所有一切諸天神祇、一人も不漏、
皆悉結縁に入給へり。仍、天承二年乙丑
卯月五日より、毎日諸天善神の入ましま
す融通億百万遍をはしめ、尽未来際まて
退転あらしと、みな一同に御約束ありけり
と云々。如此等の神通自在のやむことなき上
界已下の冥衆すら、猶、弥陀の名号をふ
かく信御坐て、衆につらなり念仏し給。
何況、薄地底下のまよひの凡夫、此念仏
にくみして往生せさらむや。此故に、この念
仏衆にたにも入ぬれは、諸天と同しく一
結の念仏衆につらなり給へし。諸天も念仏
衆也。我等も念仏衆也。又諸天の申給念
仏、併通して我等か往生の行となる。我等
か申念仏、又通して諸天諸人の出離
の行となる。然は此念仏衆につらなりぬる者は、
毎日億百万遍の行者也。如此他力の行を
たかひにかよはして自他おなしく往生
するを、自力三業をはなれたる願行具足
の他力融通念仏とは申也。此等の先蹤を
もておもふに、日本に生をうけたらん人は、
必弥陀に帰し同く名号を唱へし。流を
くみて源を尋れは、我朝は是神国也。又
是念仏有縁の国也。一度も法味をたて
まつれは、神明納受□[7]垂給。此故に、上天下界
の諸天をの〳〵こそりて一同に弥陀の名
号を撰て、称美讃嘆し給へる事、諸教
の中にをきてたくひすくなき事也。
是即、日本に弥陀教のひろまるへき先標
にあらすや。是をもて一切神慮に相叶はむと
おもはん人は、諸の社[8]□へまいりても、先本意と思
食す念仏奉法[9]□□、五衰の霞はれ、三熱
のほのをしめり、本覚真如の城に遊給へし。
か様に心えて一切の所望を祈念せは、現当二世
の所求、速疾[10]に成就すへし。若人ありて、神国に生
れなから諸神の信し御坐念仏を或は軽浅し、或[11]
誹謗せん輩は、おそらくは[12]冥衆の加護なき故、
今生には一切災難□[13]□□、後[14]□には悪趣の苦果
のかれかたき物をや。しかりといへとも、謗

法闡提廻心皆往のいはれ有故に、信謗共に一
仏浄土の縁となるへし云々。かるかゆへに、冥衆
結縁の奇特に信心ます〳〵猛利にして、勧進弥
をこたりなし。抑、人倫の心ある与善結縁は誠に
然るへし。おもんはかりなき鳥畜の類に至まて、此善
願にくみするよし見15□□□。是又不思議の事なるへし。

《絵①》

1　破損の跡と筆跡の一部を写す。□→の
2　まことに→まとに
3　筆跡の一部を写す。□□→前に
4　はなれ→離
5　破損の跡を写す。無□□→無漏の
6　他力の行→他力行
7　破損の跡を写す。□→と
8　破損の跡と筆跡の一部を写す。社□→社壇
9　破損の跡と筆跡の一部を写す。法□□→法楽は
10　速疾に→速疾
11　或→或は
12　故→故に
13　破損の跡を写す。□□□→きたり
14　破損の跡と筆跡の一部を写す。後□→後生
15　破損の跡を写す。見□□□→見えたり

【第二段】

上人春秋六十一、保延五年己未正月にさきた
ちて七日に死期をしる。臨終にのそむ
て霊瑞あり。異香草菴にみち、紫雲苔
砌にそひけり。青嵐の嶺にうらむるひゝき、
はるかに簫笛1箜篌の曲かとおほえ、瀧2水
石にむせふ声、をのつから琵琶鐃銅鈸の
しらめかとうたかふ。往生の儀式、言語のお
よふ所にあらす。又入棺の時、其身の軽き
事こう毛のことしといへり。

《絵②》

1　簫笛箜篌→簫笛琴箜篌
2　瀧水石→瀧水の石

【第三段】

大原の覚厳律師の夢に、上人来て告て
のたまはく、我已本意のことく、上品上生
の花台にあり。是、ひとへに融通
念仏の力なりと云々。

《絵③》

【第四段】

鳥羽院、この念仏百反受まし〳〵て、
猶重て数遍を千遍にまし、長日おこ
たりなく御つとめありけるうへ、諸僧
綱に仰て、さかりに此念1仏衆に入しめ
給けり。

《絵④》

1　念仏衆に→念仏衆

【第五段】

広隆寺女院、この念仏を受させおはし
まして、法金剛院にて百ヶ日の間御念仏、
即六口の禅侶におほせて、尽未来際
の御願として、日夜不断の御念仏
をはしめをかれ
けり。

《絵⑤》

【第六段】

和泉前司道経か女子、上人のもとに
行て、当日に尼になり、けさ衣[1]
をそめて、比丘尼の形となり、みつから
案して名を如々とつきぬ。此念仏
を受、臨終にのそみて持仏堂[2]
に入、おもてを西方にむかへ、掌を合、
跏趺坐して往生をとけおはり
ぬ。

《絵⑥》

1　けさ衣→袈裟衣
2　にのそみて持仏堂→ナシ

【第七段】[1]

城南寺供僧心源か父母、現世祈の
ために、此念仏三千遍を受て、
父母往生すと夢に
見えおはり
ぬ。

《絵⑦》

1　C・C本詞書・絵ともに現在所在不明。

【第八段】[1]

青木の尼公、この念仏衆に入て
七日に往生をとけにけり。

《絵⑧》

1　C・C本詞書は現在所在不明

【第九段】

木寺の源覚僧都の牛飼童の妻女、
難産によりて死すへかりしか、此念
仏衆に入て命をのへにけり。これ
をきゝて念仏にいる人二百七十二
人なり。

《絵⑨》

【第十段】

北白川の下僧か妻、この念仏三
千反をうけたるによりて、閻魔の
庁よりかへされにけり。

《絵⑩》

【第十一段】

去正嘉の比、役厲おこりて人多病死
けり。其時、武蔵国与野の郷に、一人の名主
ありけり。年来念仏信心の人にて、世間
役厲をのかれんかために、家内の老少を
すゝめて、明日より別時念仏を始へき
にて、番帳を書て道場に置けり。其
夜の夢に、異形のもの共無数村かり
て行けるか、此家の門の内へいらんとし
けるを、主出向ていはく、此は家内の男
女意をひとつにして別時念仏をはしむ
へきにて、結番して、既彼番帳を仏前に
をけり。乱入する事なかれといふ。こゝに、[1]
役神とゝこほりて云々、汝か云事実に
しか也。然は番帳を披見すへしといふ。主[2]
則是を見するに、役神隨喜せる気色にて、

結衆の名字のしたことにはん形を加て
けり。主いはく、我に一人の息女あり。彼他
所にありといへとも、彼名字を書て此念仏
にいれんとおもふ。役神これをゆるさすと見
てさめぬ。其夜あけて番帳をみるに、
誠に名字のしたことに判形あり。いろはの
文字を書損せるかことし。其色やきゑ
をしたるにゝたり。夢にたかえす、家内の
老少いさゝかもつゝかなきに、彼他所にある
息女はこの病にておはりにけり。この事
其聞ありて、彼番帳をは将軍家へめさ
れてけり。これはまさしくかの番帳を
見たる人のかたり侍しを、後に年へて
これをしるすか故に、実名をはわすれぬ。是
併、祇園部類眷属等も皆融通念仏の結衆
にて御坐せは、彼異類異形と申も別の物
にあらす。皆祇園部類眷属ともなれは、本
より此念仏衆に入たる役神等なれは、真
実に深志をいたして、道場を荘厳し
て番帳をゝり、明日より別時念仏を始
むへき信心のまこと色に顕れは、行役神
も番帳に判形を加へ、隨喜して
すきにけり。されは、三心具足の念仏は
役厲のおそれあるへからすと申は、これを
もてしりぬへし。されは念仏にかきらす、
一切の別時別行を三日とも乃至七日
ともせん所には、かならす結番して行法
をははしむへき事、是をもて証拠とす。
殊、別時念仏のすくれたる事、証拠分明
也。故に、念仏行者は常に別時をすへ
き也。長時には少々悠々なれとも、別時
の行法をは我も人も余念なく、同
心にいさみてすへき也。応知云々。

《絵⑪》

1　なかれ→なしかれ

2　也→なり

【第十二段】

右、本願良忍上人融通念仏根本の
帳にまかせてしるすところなり。
この本帳は良忍上人、厳賢上人につた
へしよりこのかた、明応聖人、観西上
人、尊永上人、次第に相承せり。凡、本帳
□[1]入人数三千二百八十二人也。[2]その中、
速疾に往生する人六十八人としるせり。
この外、朝市に徳をかくし、山林に名を
のかれてひとり修行し、ひとりさる輩
そのかすをしらす。いはんや辺土下
賤のたくひ、遠国きよちうのやから、展
転の風聞はるかにへたゝりて往生の
証拠分明ならされは、これをしるすに
あたはす。上人滅後の今にいたるまて、
隨喜結縁のともから雲霞のことく
にあつまれり。これらの奇特先蹤
を伝きゝ給はん道俗、かの念仏を
うけ、名帳に入給はゝ、今生には一切の
災難をはらひ、後生にはかならす往生
の素懐をとけ給はん事、けん証右
にのするかことし。一念もうたかひあ
るへからす。これをゑつにあらはす志は、

在家の男女に念仏往生の信心を増
進せしめむかため也。仍、正和第三暦中冬
上旬候、記之。
欲来生者　当念我名　莫有休息
即得来生
光明遍照　十方世界　念仏衆生
摂取不捨
相好弥多八万四　一々光明照十方
不為余縁光普照　唯覚念仏往生人
極楽化主弥陀尊　隨順念仏諸衆生
毎日千遍来住処　踊躍歓喜無譬喩

《絵⑫》
1　破れの跡と筆跡の一部を写す。□→に
2　その→其

【奥書識語】
下巻紙数廿八枚記
融通念仏
軸二暦応四年十月十三日毎日六百反僧経源（花押）

此融通念仏縁起二巻之図者、
惣源本也。絵越前守長隆真蹟、
詞書、世尊寺流之名蹟、書ハ弘定模。
絵段、予、行雅、定実、定時、定之、定胤、尚章、定文、定雅、実周模之。
嘉永五壬子季
二月
藤廼屋弘（花押）

（あべ　みか　歴史文化学科）